

入選

親切のバトンをつなげたい

徳島県 内町小学校
5年 小田美幸

私は、小学1年生のころ、通学路で転びました。まだ、登校になれていませんでした。ひざをすりむいて、血が出ていました。いっしょに登校していた友達は、気づかないでどんどん先に進んでしまい、とても心細かったです。

そのとき、反対側の歩道から、知らないお姉さんが走って来て「大丈夫かな。」と声をかけてくれました。そのお姉さんは、優しい目で、「歩けるかな、いっしょに学校まで行こうか?」と、聞いてくれました。お姉さんは、黄色のカバーがついた私のランドセルを、せおってくれました。そして、手をつないで、私の様子を気かけながらゆっくり歩いてくれました。

私は、お姉さんが同じ制服ではないので、小学生ではなくて、「中学生か高校生かな、大きな。」と思いました。私は、小さかったけれどお姉さんが「登校時間に間に合うのかな、ちこくしないかな。」と心配でした。でも、はずかしくてその言葉を口に出せませんでした。

そんな私にお姉さんは、「何小学校?お名前なんていうの。」と、温かい言葉をかけてくれました。その言葉に私は、小さな声で「内町小学校、名前はみゆき。」と言いました。すると、「そっか、みゆきちゃん、可愛いお名前だね。」と笑顔で言ってくれました。「私も、お姉さんのお名前を聞きたい。」そう頭にうかんで、言いたかったけれど、言えませんでした。

学校の校門まで来たとき、そこにいた校長先生は、私とお姉さんのことを見て近くに来てくれました。校長先生に、「どうしたんですか。」と聞かれると、「みゆきちゃんが転んでいて、歩けそうになかったので、ランドセルを持っていっしょに学校に来たんです。」と、お姉さんが事情を話してくれました。

校長先生は、お姉さんの学校名と名前を聞いていましたが、残念なことに私は覚えていません。最後に校長先生が、「学校には、こちらから連絡しておきますね。」と言いました。私の記憶に残っているお姉さんは、制服すがただったことだけです。同じ学区の中学生だったのかな、と思います。

お姉さんにとって、このときの親切は、小さなことだったかもしれませんが、今はもうわすれているかもしれませんが、私は今でもそのときのうれしかったことをよく覚えています。人のことでも、心配してくれる人がいるんだな。いつもなら、知らない人に声をかけられたら怖いのに、知らないお姉さんだけれど、怖くなかった、とも感じました。

私を助けてくれたお姉さんに、もう一度会えたら、お姉さんのお名前、どんな気持ちで私を助けてくれたのかを聞きたいです。そして何よりも、自分も登校中なのに声をかけてくれて、ありがとうと伝えたいです。私は、このできごとから、人に優しくしてもらえると、幸せな、あったかい気持ちになれることを知りました。

私も、お姉さんからもらった親切のバトンを他の人へわたしていきたいです。